

日米合同演習「降下訓練始め」 *Jumping in the New Year with a joint-partner exercise*

January 19, 2022

By Staff Sgt. Ryan Lackey
374th Airlift Wing Public Affairs

1月13日、千葉県習志野演習場で、米空軍、航空自衛隊、陸上自衛隊の日米の隊員が、恒例の「降下訓練始め」を実施した。

今回の演習で、陸上自衛隊第1空挺団の空挺隊員約300名は、(空自)C-130Hハーキュリーズ2機、(空自)川崎C-2グレーハウンド2機、(陸自)CH-47JAチヌーク及びUH-1Jイロコイ・ヘリコプター数機と共に飛行する米空軍のC-130Jスーパーハーキュリーズ3機から落下傘降下を行った。

第36空輸中隊C-130J教官パイロット及び今回の演習の作戦指揮官チェルシー・ジョーンズ少佐は、「当行事は、米空軍が2019年から参加している陸上自衛隊主催の行事である」と述べ、「この二国間の空中急襲演習は、同盟軍の作戦遂行能力と速さを示した。我々は同盟の軍用機7機を飛ばして数百人の空挺隊員を迅速に展開し、9分以内に目標エリアに到達した」と述べた。

ジョーンズ少佐が率いるチームは、数カ月に渡って陸上自衛隊の作戦プランナーや航空自衛隊のパイロットと共に、作戦の飛行隊列を調整した。その準備により、作戦リーダーは演習中にリアルタイムでコミュニケーションをとり、迅速な調整と効率的な空挺降下の実行を可能にし、日米の作戦パートナーの効率的なチームワークとプロフェッショナリズムを示すことができた」とジョーンズ少佐は語った。

ジョーンズ少佐は、「日本のパートナーと働いたことは、決して忘れない。我々は皆、互いを尊重し、思いやりを持って、運用プロセスをかみ合わせ、さまざまな壁を乗り越える方法を学んだ」と述べた。

恒例の「降下訓練始め」は、空挺部隊の新たな年の降下安全を祈願する自衛隊の伝統として数十年前から行われているもので、最近では日本とインド太平洋地域全体のパートナー国の共同防衛に対する同盟国の取り組みを新たに作る一環(の行事)として実施されている。

